

NETWORK since 1983 TERRA

VOL.122

2006 FEBRUARY

2

目次

CONTENTS

■特集

じむきよくつうしん

.....6~7

■連載

第三の眼.....2

とげずと云ふことなきなり.....3

ボツワナ〜砂漠のカンバス.....9

今日もボレボレ.....10

■報告

森太郎寮プロジェクト報告.....4

ミャンマーモニタリングツアー報告.....5

タイ地球市民奨学金日より.....8



女性の笑顔の素ばらしさは国境を越えて（昨年のタイへの里親ツアーにて）

「手を取り合って」

現在、地球市民の会が支援をしているタイ、ミャンマー、スリランカは一般的には発展途上国として理解されている。これら三つの国の中でもっとも発展している国はタイである。しかし同時にこの三つの国の中で、都市と農村の経済格差が一番大きいのもタイなのである。都市から一歩外にでるとそこには急速な経済発展に取り残された人々の生活がある。その格差はタイの都心部が発展すればするほど大きくなっているように見える。

この地域間格差は、現在、途上国をとりまく重要な課題の一つとなっているが、日本でも、これまで比較的格差が小さいとされてきた都市間・地域間の格差がひろがりつつあるとされている。そしてこの格差は、いまだよりよい労働条件・生活環境を求めて都市へ移動する人々の存在と、少子・高齢化が進む中、今後個人の所得分配の面においても広がること懸念されている。

この状況を反映するかのように現在日本全国で急速に「ムラ」が消滅している。農水省の統計によると、前回の調査に比べ、わかつているだけで、全国で五千もの集落が消えた。そして今年ついに全国の過疎地比率は五〇%を越えた。多くの集落で行政サービスの低下とコミュニティの機能が崩壊し、高齢者だけが取り残される状態が出現している。

スリランカの農村で、ある若者に将来はどうなりたいかという問いをした。その青年は村人の大半が十分に収入を得ることができていない現状を将来何とかしたいと答えた。ミャンマーの農村では貧困に陥っている村の若者が、将来自分の村の農業を再生させたいと地球市民の会が現地でおこなっている農業研修を受けている。他方先日参加した佐賀の地域づくりの話し合いでは、人が出入りしなくなった自分の地域を何とか活性化したいという青年に出会った。

経済発展の途上にある国の中にある「格差」とそれを遂げた国の中で新たに顕在化しつつある「格差」。どの国においてもそれを一度に改善しうる単一の処方箋は存在せず、自らの責任においてその時代のその国の課題に立ち向かわなければならぬ。その作業は時として孤独で、自分の前に大きな壁をつくってしまうことがある。そんな時、先に書いたように国や状況は違っても互いの場所ですら課題にとりくんでいる仲間がいると知るとはそれだけで心強い。

地球市民の会では毎年、現地へのスタディーツアーを実施し、現地の人との交流の機会を設けている。この交流がこれまでの活動を支え発展させてきた。現地のふれあいは、国は違っても互いに学びあい、支えあっていくことの大切さを教えてくれる。今年はこの三月下旬にタイを訪れる。この機会に一人でも多くの人に現地の人々と交流していただければと願っている。

世界の平和と親善 地域社会の向上発展



TERRA PEOPLE ASSOCIATION

特定非営利活動法人

地球市民の会 TERRA PEOPLE ASSOCIATION

840-0822 佐賀県佐賀市高木町3-10

TEL 0952-24-3334 FAX 0952-24-7321

E-mail: office@tpa.nk-i.net

ホームページ: http://tpa.nk-i.net

ホームページがリニューアルされました。御覧下さい。



「仲間是有難い」

地球市民の会会長 古賀 武夫

全国の会員の皆様、お元気で新年をお迎えになられましたでしょうか。

さて、当会も当初の佐賀フランス研究会の設立から数えて満三十年を迎えました。この間、様々な紆余曲折がありながら、ここまで続いてまいりましたのも、これ全て会員の皆様の御厚意によるものと心から感謝いたしております。現在、佐賀の事務局で登録されております会員が六百名強、全国各地の方々を入れますと約一千名の方々のご協力を賜っております。一時期の二千名近い会員数を考えますと、およそ二分の一とは言え、全国のNPO法人、およびNGOの中でも会員の皆様から毎年五百万円以上の会費を頂いている団体はそれほど多くはないと伺っております。会長を仰せつかつている私としては、全国お一人お一人の会員の皆様に直にお会いして御礼を申し上げるべき所ですが、中々それもかなわず、大変申し訳なく存じております。

ところで、古くからの会員で、豊悦こと豊川悦郎（五八才）という方が、長崎県福島町におられます。私が豊川さんと最初に出会ったのは約二十年前になると思います。当時当会は全国から留学生を招き、九州七県そして愛媛県でホームステイ交流とシンポジウムを

行う「小さな地球計画」を始めた所で、各地でその受け入れのお世話をして頂く各市町村での実行委員会を立ち上げる作業を積極的に行っていました。その頃出会ったのが、この豊悦さん（本物の豊悦とは似ても似つかぬ方ですが）で、その後「日タイ交流事業」でタイにも一緒に行き、タイに自転車を贈る事業では、自宅を事務局として、寄贈できる自転車があると連絡が来れば、自分のトラックで一時間も二時間もかけて頂きに行ってもらっていました。この作業にはご自身のみならず、お母様、奥様そしてお子さん方も協力、まさに一家をあげて取り組んで頂いておりました。豊川さんと知り合って数ヵ月後のことだったかと思いますが、私と出会う数ヶ月前に弟さんを亡くされていることを知りました。その弟さんが私と同年で、失意の中で知り合った私を弟さんの身代わりのように思われていたとの事を伺いました。

その後、豊川さんは事業に失敗、多額の借金を抱え、とある会社に勤めることとなりましたが、そこもうまくいかず、奥様と二人で豆腐屋を始められました。

少しずつ借金を返済していく中、又もや悲劇が襲いました。奥様の交通事故です、大変

な重傷で生命の危険にさらされることとなります。幸いなことに一命を取り留め安堵の胸を撫で下ろしましたが、今度は自分自身が交通事故にあってしまいます、しかし、豊川さんは人生を諦めませんでした。その傷から見事回復し、後遺症の癒えぬ奥様を抱えながら、再び豆腐作りに精を出すこととなります。

その豊川さんが、先日ひょっこりと当会の事務局に顔を出し、豆腐の差し入れをしてくれたのです。ほんの数分の滞在と立ち話、そして「また来るよ」という言葉と共に帰っていかれました。そして翌日、次の様なメールが届いたのです。

「昨日は久しぶりに皆さんに会え嬉しかったです。生きていて良かった。一時期は何でこんなきつい目にあうのか、俺が何か悪いことをしたのかと、女房と一緒にあの世に行こうと思ひ落ち込んでいました。」

でも俺にはすばらしい仲間が沢山あったんだとあらためて思いました。そのうちまた伺います。皆さんに呉々も宜しくお伝え下さい。」人間、生きているといろんなことが起こります、良いこともあれば良くないこともあります。

でも、本当に仲間がいることは有難い。



全国の会員の皆さん、これから仲間としてどうぞ末永くお付き合い下さいますようお願い申し上げます。

（平成十八年二月十三日）

地球市民運動

人 社会 自然 の相互依存を十分認識し

すべての いのち を慈しみ 強く 優しく 豊かに 美しく育てる

第7話 「地球市民の会的『循環型農業』」

ミャンマープロジェクトマネージャー 大野 博之

我々の事業の中における農業支援事業の中核を担っているのは循環型農業の普及である。技術的には、有機農業や自然農業といわれているものと同じである。ほとんどの技術が日本の農家で行われているもので、ミャンマーに来てから日本の農業技術はやはり素晴らしいと再確認をした。日本の狭い国土で、2000年以上も同じ場所で作物を作り続けているということは驚くべきことである。それは、我々の祖先が子孫繁栄のために連綿と続けてきた血のにじむような努力と弛まぬ研鑽の賜物であることは疑いようもない。幾ら感謝しても尽きる事のないような想いを抱いてしまう。

ところで、ミャンマーは歴史的に2つのタイプの農業のスタイルに別れる。それは、ミャンマーの国土に流れる大きな川、エヤワラディの流域にその豊かな水とともに発展した水稻を中心とした農業と、山間部に住む少数民族による焼き畑農業である。前者は、毎年雨季に溢れる水と栄養を多く含んだ土によって永続的に行われているものである。この農法を用いる熱帯地域は多くの米を作ることが可能で、ミャンマーの豊かな食文化を支えている。一方後者は20年に1回のペースで山間部を移動しながら行う農業である。その実態は我々にはなかなかわかりにくい農業形態である。

日本人からすると、焼き畑農業は森林破壊の原因の1つとして消耗戦の農業のイメージがある。しかし、この土地に古くからあるこの形態は、我々の持つイメージとは裏腹に持続性の高い農業形態なのである。祈りを捧げ、森を焼き、その灰を肥料に陸稲を中心に農業を行う。数年すると収穫が減るので感謝の祈りの後その地から別の地に移動する。次にこの地に帰ってくるのは20年後だ。20年の間に森は復元し、帰ってきたときはまた豊かな農業が約束された豊かな土地になっている。

ミャンマーの歴史的な農業のスタイルは両者とも、人間が手を加えなくても栄養のある土地でできる農業であった。したがって、歴史的に畑に施肥をするという文化が存在しなかった。その為、近年大きなダメージを受けたのが焼き畑農業をしていた地域である。山岳少数民族に対して、政府の統治のための定住化政策が行われた。これが歴史的に確立した焼畑農業の循環のスタイルを無効にしてしまったのだ。もちろん人口増加も原因の一端であるのだが。

我々が協力をする山岳少数民族の地域では日本が古くから行ってきた堆肥を使って畑に入れる、という習慣がなかったのである。定住化と共に村の近くの土地で収穫できるだけ取るという農業は、土地の栄養を損ない、収穫できない畑を作り出した。そのような状況の中、今から30年ほど前、化学肥料が入ってきた。農民にはその使い方の指導も十分にされず、農民は使えば使うほどよくなると信じ込み、大量の化学肥料の投入を行った。一時的に好転した収量も化学肥料の多投による影響で徐々に減少していき、土地がなお一層破壊されていった。

地球市民の会はそのような彼らに日本の古くからある技術に現代的なアレンジを加え、ミャンマーに合致させて循環型農業として紹介しているのである。しかし、技術よりも重要な事がある。それは循環型農業を支える考え方、思想である。

ピンダヤ研修に来るミャンマーの農民は農業をするために必要なものは何かという質問をする。答えは太陽、空気、水、土である。しかし、空気と土がなかなかでない。出てこないということは普段から考えていないということである。我々が重視しているのは土である。日本の方に説明するまでもないだろうが、土の中では微生物があらゆる有機物を分解し、土の栄養をつくっている。つまり豊かな土地とは微生物がたくさん生息する土地の事なのである。土の中の微生物のお陰で作物が育っている。私はこの事を彼らに伝えているのだ。

この事実を通して、植物と動物の相互依存関係によって農業が保たれているということを知り、そして、互いに支えあっているという状況を知る。そうして自然にたいする感謝の気持ちを持たなければならないということを考えていくのだ。

研修のはじめ、研修生に「土にありがとうといったことがある人はいますか」と質問をする。研修生はみんな笑って「そんな事はした事はない」と答える。しかし、研修の最後に同じ質問をすると研修生は神秘的な面持ちで笑いもしない。循環型農業の基本は「感謝」であるという事が伝わったのだと思う。もっとたくさん収穫したいから、化学肥料をたくさん使用し、土地から取れるだけたくさん取ろうとする。これは「欲」なのである。欲の農業、つまり収奪型農業は自分だけが良く考える農業であり、相互依存という自然の摂理を忘れた農業なのである。私たちは自然と助け合いながら土に感謝をし、微生物に感謝をし、共にいつまでも一緒に生きていくことを祈る気持ちを持つことこそが循環型農業である、と伝えているのだ。

日本にある「御礼肥（おれいごえ）」^{えじょう}。これは収穫の祭り、秋祭りの前後に畑に肥料を入れる日本農業の古くからの習慣である。来年もっと収穫が増えるように入れる肥料ではなく、今年一年農業ができ、収穫があったことに感謝をして入れる肥料である。これこそが、地球市民の会が考える循環型農業の基本であり、我々日本人が世界へ貢献できる最高の考え方ではないだろうか。そしてもう一歩進めるのなら、その祖先から続くこの良き考え方を我々日本人はまだ保持し、生きていけるのだろうか我々自身に自問する必要もあるのではないだろうか。ミャンマープロジェクトとは我々自身が我々自身を見直すための鏡のような事業なのかもしれない。（了）



循環型農業①



循環型農業②

森太郎寮プロジェクト報告

森太郎寮は完成から一年半経ちました。そこで去る一月二十三日に寮へ行きその使用状況について村のコミティ（委員会）から聞き取り調査を実施しました。

■事業の目標は？

森太郎寮の目標は優秀でありながら中学校、高校へ行くのが困難なミャンマーの学生（五年生から十年生）に、寄宿舎を提供し、進学を可能にする、ということでした。（建設に至る経緯は過去のネットワークテラを参照ください）。

ここでの高校に行くのが困難な子どもとは、①近隣には小学校しかなく、遠距離の中学校、高校に通うことができない子ども、②経済的な貧困のため進学できない子どものことを意味しています。

そしてこのような子ども達が学校に行くことができるようにと建設された森太郎寮は、現在下の表にあるように総勢七十九名の学生によって利用されています。

学校区分	学年	総数 （うち近隣の村の子どもの数）
高校	10年生	43名（20名）
	9年生	36名（10名）
中学		0名
計		79名

これらの状況をふまえ寮を建設した際の目的と現状を照らし合わせて

みました。

①寮に入っている生徒は優秀？

この寮へ入る条件の一つは学業成績が優秀であることでした。この地域の進学率が三〇％であるということと考えれば、この寮に入っている九年生、十年生はすでにこの地域の優秀な子供であるといえるでしょう。②学校から遠く離れた生徒によって利用されている？

現在寮には五年生から八年生はいません。また、上の表からもわかるように九年生、十年生についても、近隣の村の子どもが半数近く含まれています。

③利用者のうち経済的に困難な子どもはどれくらい？

聞き取り調査によると貧困のため学校に行っていない子供は近隣の村にまだいるにもかかわらず、寮に入っている生徒は、これらの生徒に比べると貧困の度合いはひどくないことがわかりました。

ここまで見ると、今回の寮建設は、事業の当初に設定した目標を厳密には達成しきれていないということが見えてきました。

■現在のようない利用状況になった理由？

では、どうして現在のようない利用状況になったのでしょうか。今回の聞き取り調査で、遠距離の子どもがいないことについて、村コミティは以下のような理由を話して

くれました。まず、昨年政府の方針で各地域に急激に中学校建設が許可され、実際に中学校が建設されたそうです。そのため、中学進学希望者は自分の家から中学校に通う事ができるようになり、家から離れた寮に住みながら通う必要がなくなったとのこと。また、コミティは寮建設の時点では中学建設の予定を知らなかったとのことでした。これまでも、色んな村が中学建設の許可を政府に願っていた。しかしながら、今まで何年もそれは許可されてきませんでした。そしてこの寮建設の時にも中学校建設が許可される見込みはほとんどありませんでした。その為寮は学校に通うために何より必要なものだったのです。軍事政権ゆえの突然の、急激な政策がなされたために、当初目的としていた中学生による寮の利用が実現されなかったと思われる。



セレー森太郎・寮生

同じように上であげた③についても経済的に困難な子供が多く利用できていない理由がありました。それは寮での食事です。現在、寮の食事は、学生が家から食料を持ってきて自炊をしています。ですので遠距離の子どもで寮に入るためには食材を自分で持ってこれなければならぬのです。村から食事のための費用を提供できれば良いのですが、現時点で村にそれだけの余裕はありません。したがって本当に貧しい家庭の子どもは物理的に寮にこれないのです。寮を維持するために、鶏の飼育と豚の飼育、及び寮農園の実施を行ってきましたが、現時点では鶏の飼育がうまくいかず、豚や学校農園はまだ資金になるまでに至っていません。更に貧困家庭では五年生、つまり十歳の子どもは家庭での貴重な労働力であり、生活のために働かなければなりません。この点については、事業実施に際してもう一步踏み込んで村の状況を把握するべきでした。

■今後の方向性

当初、利用してもらいたいと思っていた子どもに現時点で十分に寮を利用してもらっていない。これは同時に事業実施当初の目的を十分に達成しているとは言えません。しかし、一方で、現在寮は当初の見込みとは違った形で村にとってなくてはならない重要な施設として機能しています。

九年生、十年生は全ての学生が寮に住み込み、試験勉強をしています。ミャンマーの教育制度では十年生終

了時の試験は重要な試験です。合格率はミャンマーの平均で三〇％、辺境地域では十八％ぐらいです。この試験の結果によって合格者は高校卒業の資格が与えられ、上位者から医学部、理工系、外国語系、文科系の大学にいけるようになります。まさに人生の分岐点的な試験です。そのため、十年生を試験にパスさせる事は教育が遅れたこの地域にとって喜びであり、希望でありそして誇りでもあるのです。故に、森太郎寮で九年生、十年生が勉強できるという事は、コミティが子供達に教育の機会を与えるという大きな役割を果たした事になります。村はお金を出し合い、学校の先生に謝礼を出して寮で毎日補習をしています。子どもは皆で勉強する事で意欲を高めています。日本の受験生が図書館で勉強するようなもので、近くの子どもは食事を家に食べに帰り、それ以外は寮で過ごしています。

村にとってはこの寮が希望でありその存在が喜びとなっています。それはこの寮の完成を可能にしてくださった、大学院進学を目指していた故森太郎氏の意志が、遠く離れたミャンマーのこの土地で現地の九年生、十年生に進学の夢を与え受け継がれているかのようにです。

村のコミティは今後五年生以上の貧困家庭の子女の受け入れのために基金を作っていきたいと語っています。そのために、今後村は努力すると話しており、長期的には当初事業目標は達成される可能性が秘められています。

ミャンマーモニタリングツアー報告

(2005年11月8日～14日)

去る2005年11月、外務省日本NGO支援無償資金の助成によりミャンマー・カックー地域の水力発電が完成しました。11月8日～14日の日程で、現場事業視察とセレモニー出席のため、副会長を含む参加者4名のツアーでミャンマーへ行ってきました。完成した発電所は電力量50W×2基です。この発電所の完成により423戸への配電が可能となりました。

昨日までの雨が嘘のように晴れ渡り青空が広がる。今回の視察メインイベントであるカックー発電所の完成式の日である。現地に向かう途中、高原一面に広がる菜の花畑が目飛び込んできた。ジャパンフラワーと呼ばれ、原産は日本らしいが、品種は違うようである。車に揺られて1時間程過ぎた頃、突然一望に見渡せる丘の上に出た。遠くの山の稜線を眺めていると、阿蘇の外輪山や根子岳にそっくりの風景が目に入り感激した。ここに農業支援の一環として支援している実験農場があり、真新しいバンブーハウスが整然と10棟程並んでいる。色々な取り組みが始まったばかりである。

セレモニーのメインゲストとして、東部地区軍司令官コマンダー、ポー族の族長アバー・ウアンカムティ、日本大使館外交官横山氏、TPA代表として私の4名が出席した。現場までの道のりは雨上がりの悪路ではあったが、前日まではもっと悲惨な状態で、下見準備のため、雨の中現地に向かったプロジェクトマネージャーは車が脱輪したりと危険な目に遭いながら3時間かけて歩いたとのこと。我々の目に触れない影の部分で多くの苦労が払われていたことが後の報告で分かった。その苦労を吹き飛ばすかのように、セレモニーのテープカットで舞い上がった風船の群れは、天高く青空の彼方へと吸い込まれていった。

外務省から助成金を頂いて完成した水力発電設備は立派なもので中国製の大きなタービンが2基据えられていた。それぞれ発電量は50kWで、6ヶ村、423戸に電気の供給が供給可能となる。このため、沿道は村人総出の大歓迎の行列が延々と続き、お祭りのような花道を各代表と一緒に手を振りながら歩く。マスコミの取材も多く、発電所の完成をいかに待ち望んでいたかが伺い知れた。近くの小学校で式典が執り行われ、会長より預かった挨拶文を読み上げた後、関係者への記念品の授受が行われ無事、式は終了した。



その後、電気が通った近くの村人を集めてインタビューを行った。電気が通って良かったことはと尋ねると①夜も農作業が出来るようになったこと。②子供達は勉強が出来るようになったこと。③女性は炊事がし易くなったこと。④ローソク代がいなくなった事と火災の心配がなくなったこと。⑤近くのカックーパゴダに、夜も安心してお参り出来るようになったことなどを挙げてくれた。

また、今回の電気事業を進める中で、予定外の2村から電気を分けてもらいたいとの要望があった。相談の結果、自分達だけが恩恵をこうむるわけにはいかないとの理由で、自分達への供給量が減るのを承知で彼らはそれを了承した。

自分のことしか考えきれない人間が増えていく日本社会と比較して、ミャンマーの人々は貧しいからこそ、分かち合い支え合うことの出来る社会がまだしっかりと根付いていることを実感した。

また、村人から出た「この発電事業は日本政府とTPAと村人の協力事業で成り立っており、自分達の大きな財産である。後世に代々受け継がれるように大事に守っていく義務があり、このことは、日本政府とTPAのおかげであることを忘れないように語り継いでいきたい。特に、大野氏(地球市民の会現地プロジェクトマネージャー)の功績は大変大きい。」との言葉が印象に残っている。彼らの感謝と、当会の現地プロジェクトマネージャーが彼らに慕われ信頼されていることが充分過ぎる程伝わってきた。帰りには、ナウンシンデモファームやハムシー寮の調査も行った。

ミャンマー支援事業が、ここまで現地の人々と絆を深められ成功しているのは、会員の皆様のご支援と、それを何とか現地に伝えようと家族でミャンマーに移り住み、本気で取り組んでいる現地プロジェクトマネージャーが現地からの信頼を得られているからである。

ミャンマー支援事業は、インフレや首都移転など色々と課題も多い。前任の平野評議員が基礎を築き、大野プロジェクトマネージャーがその上に木や花を植えている。これらが根付いて結実するのはもう少し先であろうが、関った以上は責任を持って取り組む必要がある。この築き上げたフィールドを生かした事業を見出していくことも可能であろう。最後にこの事業を支えていただいている会員の皆様にこの場をお借りして改めまして心より感謝申し上げますと共に、スタッフ一同変わらぬご支援を賜れますようお願い申し上げます。



カックー発電所の完成式に参加して

副会長
多良 淳二

タイ事業担当

聖母西村 意外なペット



聖母の微笑みでお馴染みの西村事務局員。なんと、彼女の家のペットは亀とウーパールーパー!!意外すぎる!!

ミニボス+スリランカ事業担当

ヤマタカのお気に入り

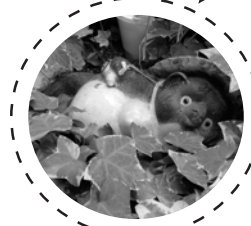


お土産にももらったミャンマーの白象。山田事務局員の机のそばでいつも、彼女を見守っています。パオーン

無事務局責任編集 情報オアシス



毎度お馴染み地球市民の会事務局 リクエストにお応えして(?)今回は写真バージョンで事務局を大解剖します。題して「地球市民の会事務局探訪」どうぞお楽しみ下さい。



Tanuki in Wonderland

ここが玄関。実は地球市民の会は古賀英語道場の事務所に間借りしております。

ミャンマー事業担当

池田の不思議 マスク2枚重ね



風邪対策の為だと思いが池田事務局員はマスク2枚着用!本人に理由を聞いてみた!

池「それはですね、僕が甘いマスクの2枚目だからです。」「おーい山田君池田君の座布団3枚持ってー」

経理・総務担当

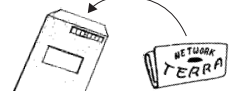
川平の噂!なぜ猫か?



もともとは、事務局で猫をかぶっていたため猫のイラスト顔だったが、現在では、その猫かぶりもすっかりはがれおちて、化け猫状態との噂がちらほら...

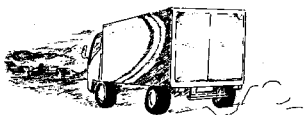
12月2日

会報三つ折作業
+封筒詰め作業



12月4日

全国の会員さんに向けて、発送。



※おねがい 市町村合併や引越しなどで住所変更がある場合は事務局にもお知らせください。

12月1日



会報
出来上がり!!

11月15日~25日 印刷会社との校正やりとり

ある日の1コマ (必殺! 締切破り人)



ネットワークテラの できるまで

10月25日 (編集会議の様子)



ここでの会議で会報の特集を決めていきます。なかなか決まらないんだなーこれが。

10月31日 (原稿締切日)

仕事の合間に原稿作成

会員の皆様が(きつと!)楽しみにしている会報「ネットワークテラ」。
今回は、皆様の所へ届くまでの約2ヶ月のドラマを写真とイラストでご紹介します。

事務局ニュース

どうぞ、お楽しみ下さい。



今、更なる発展の為に、力を蓄えて備えをしています。新年度の地球市民の会の活動をお見逃しなく!!

タイ奨学金だより

2005年度奨学金の里親さんの募集に、ご支援ありがとうございました！

2005年度地球市民奨学金里親さんの募集が終了しました。

多くの皆様のご協力を頂きまして、ありがとうございました。2005年度の奨学金に申請した子供たちがそれぞれ里親さんとの出会いをきっかけに、新たな道を歩み始めています。

ここ2・3年の里子たちのプロフィールを見ていると、以前のように大家族ゆえの貧しさというものは比較的小なく、逆に家庭環境に問題を抱えている小家族が増えているようです。貧しさからの両親の離婚や両親が出稼ぎに行ったために父母や親戚に預けられた子供たち。親との死別。そんな環境にある子供たちが十分な教育を受けることができないことは、容易に察することができます。また、農作業のための労働力として期待されている子供たちにとっては、勉強を続けるために両親からの理解を得ることはとても大変な事のようにです。プロフィールの写真を見る限りでは、明るく元気な子供たち。毎年送られてくる子供たちの写真を楽しみにしているのですが、実際に彼らの家庭を訪問すると嫌でも現実を思い知らされます。プロフィールに記載されている奨学金を申請するための理由が、頭の中での理解から目の前に現実となって迫ってきます。雨風をしのぐのがやっとのビニール袋を壁代わりにした家や、教科書を買うことができなくて誰かにもらうために探すことが宿題だったり、お金がなくて昼食を我慢する子供たちが、何を心の支えにしているのだろうと考えてしまいます。まして、両親が傍にいない子供たちが何を考えて生きているのだろうかと。初めて私が現地を訪れた時に会った里子は、出稼ぎ先で父親を過労死で亡くしたばかりの時でした。2年目に訪問した時

は一緒に住んでいた優しい祖母を亡くし、3年目には母親が再婚した新しい父親と同居し、収穫の時期を迎えて忙しく働いているために学校を休んでいました。高校への進学をあきらめて専門学校へ進むことを決めていた彼は、たった3年間の月日でとても大人びた表情になり、再会を喜ぶ以前にやりきれない寂しさを感じたものでした。「がんばりましょうね。里親さんが応援しています。日本から元気を送りますから」、と伝える以外に彼らにかけられる言葉がみつかりません。

色々な困難を抱えていても、明るく優しい彼らの表情は、かえって訪れた私たちの心を癒し、元気付けてくれます。来る3月中旬には、3年間の支援を受けて勉強を続けてきた115人の里子たちが巣立って行きます。彼らの心の中には、日本の里親さんから送られたあたたかな想いが宿っていることでしょう。彼らから向けられる感謝の言葉に、私たちは支援の心を学び、考えさせられます。



2006年度タイ地球市民奨学金里親募集を開始しました

クーキャオウイッタヤ校 中学生の里親60名（支援金額3年間で36,000円）
高校生の里親25名（支援金額3年間で54,000円）

ボーゲウヤウミテープパターンナ校

中高校生の里親30名（支援金額3年間で36000円）

詳しくは事務局までお問合せください。資料をお送りいたします。

R e p u b l i c o f B o t s w a n a

ボツワナ～砂漠のキャンバス③

「ボツワナの道」

古 賀 悦 子

ボツワナの道端には、協力隊員が「マキビシ」と呼んで恐れる草の種が落ちています。その種には鋭いトゲがあり、足に刺さると大変痛い！ここではケシの花もアカシアも、全身トゲ武装。こういう

植物を眺めても癒し効果はゼロですが、しかたないです。荒野に必死で根をはったのに、ヤギやロバに片っ端から食べられたらたまりませんからね。

道路沿いには、トゲ植物の間に



制限速度時速120km



裸足で遊ぶ子どもたち



donkey car

人々が立ち、車に手をふっています。とくに地方では、バスは1日に数本。通勤や買い物、里帰りのため、人々は普通にヒッチハイクをします。隊員はみな、「日本ではありえない光景」と驚きます。平気で他人の車に乗り、また他人を乗せる、無防備なまでの信頼。助けあい、分けあいながら、荒野で生きてきた人々の習慣なのでしょうか。

道端、とくにバス停の近くには露店がでます。炭焼きトウモロコシ、マンゴー、手作りホウキ、食用芋虫、古着屋、公衆電話屋。私も、首都に出るときなど、露天で買ったブドウをつまみながら気長にバスを待ちます。時刻表はありません。ロバ車がのどかに走る村と違って、都市部では交通事故が多いです。国道の制限速度は時速120キロ。雨の夜、時速150キロで走るバスに乗ったときは冷や汗ものでした。車は大半が中古の日本車です。フロントガラスにヒビがあり、ドアやメーターが壊れているのもあります。

ボツワナの道では、車は暴走気味ですが、動物や人はのんびり歩いています。たまにマキビシに刺され、立ち止まると、トゲ植物の葉を果敢に食べるヤギの群れ、はだして駆け回る子どもたち、露天のパラソルから、鮮やかな命のざわめきが風にのって届きます。

今日も



(スワヒリ語で“ゆっくり、ゆっくり”)

タンザニア便り その3

牛嶋 啓道 Hiromichi Ushijima

毎日、タンザニアのきびしい日差しを浴び、肌の日焼けももう落ち着き、日本の四季の感覚も忘れてきている今日この頃。今回は私の仕事についてです。私は、ここタンザニアへ中学校の理数科教師として派遣されています。私が今暮らしているのはタンザニアの南東部にある“ネワラ”という小さな町です。地図で探すのも少し手間がかかります。南東部はタンザニアの中でも開発が遅れているといわれています。その田舎町のナングワンダセカンダリースクール（日本でいう中学校）で仕事をしています。ここで、タンザニアの教育のシステムについて少し語ると、子供達はプライマリースクール（小学校）に7年間通います。プライマリースクールは、義務教育でタンザニアの子供達全てが行くことを義務づけられています。7年間の学習の後には国家試験が待ち構えています。この国家試験でよい成績をとらないと、中学校には上がりません。中学校にあがることの出来る子供達の割合は20～30%といわれています。セカンダリースクールはOレベルの4年間とAレベルの2年間（日本で言う高等学校）に分けられ、Oレベルに入った2年後に3年生に上がるための国家試験が行われ、4年後にAレベルに進学するための国家試験が行われます。Aレベルに上がれるのは全体の数パーセント、いわばエリートです。Aレベルが終了すると生徒は総合大学のテストを受け、ここまでくるともう超エリートになります。生徒達は何回もの試験というハードルを越えなければなりません。テストをパスできなかった場合は先生になる為の教員養成学校、整備士などになるための技術学校等へ進学します。しかし、いかにせんお金がかかります。その為多くの生徒は、学費が払えず家業の農業をしたり、商売をしたり仕事がなくブラブラしたりしているのが現状です。私の学校は生徒数約450名ほどの学校です。生徒達は7時30分前に学校に来て掃



授業風景

除をし、その後、校庭に集まり、タンザニア国家、校歌を歌ってから、学校での1日が始まります。授業は月～金曜日まで、1日に40分の授業を9コマ受けます。タンザニアの時間割は休憩時間が殆どないため、殆ど続けて授業を受けます。間にある休憩は、20分と10分の休憩の2回のみ。生徒は午後3時まで家に帰れないので、いつもおながすいたーといってきます。その日の授業が終わると、生徒達は一旦ご飯を食べるために家に帰ります。そして、再び学校に登校し学校の掃除をしたり、サッカーなどのクラブ活動や、各教科の補講などを受けます。そして暗くなる前に家に帰ります。生徒の中には、家が遠く毎日2時間歩いて通う生徒もいます。また、家が遠い為、親元を離れて学校の近くの親戚の家で暮らしたり、1人で、部屋を借りて暮らしている生徒もいます。タンザニアでは、自分の子供ではないのに家族のように世話してくれるといったことが一般的です。その為、生徒の家族構成が分かりにくいです。授業は英語で行います。プライマリースクールでは公用語のスワヒリ語で授業をします。セカンダリースクールになると授業は英語で行います。プライマリースクールで英語は習っていますが殆どしゃべれないのが現状です。その為、英語で教えても理解できず、スワヒリ語で補足するといった感じになります。最初は私も下手な英語で教えてましたが、次第に生徒が理解できていないことに気づき、大部分をスワヒリ語で教えるようになりました。私は英語も上手くない、スワヒリ語は生活出来るぐらいしかしゃべれないといった状況なので大変苦労しています。私が教えている科目が記号を多く使用する数学だったことも私を助けてくれています。黒板に書いたり、ジェスチャーで説明したりすることで生徒も理解してくれます。言葉は意思の伝達には重要ですが、言葉でなくともいろんなコミュニケーションの仕方があるんだと最近思ってます。



授業後生徒と共に



休み中の教室



卒業式

※牛嶋さんは青年海外協力隊の理数科教師としてタンザニアで活動、昨年12月に日本に帰国されました。

地球市民ネットワーク

北海道地球市民の会

〒061-3214 北海道石狩市花川北4条2-197

会長／阿部功 事務局／新保知博

TEL・FAX：0133-74-1296

地球市民の会ふくしま

〒963-8681 福島県郡山市喜久田町卸1丁目120-1

(株)石黒

会長／事務局担当 石黒秀司

TEL：024-959-6426 FAX：024-959-6577

地球市民の会東京

〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町1-2-13

信州会ビル4F (株)ナチュラル内

会長／津川宏幹 事務局／青木高広

TEL：03-3662-0331 FAX：03-3662-0400

E-mail：aoki@nun.co.jp

地球市民の会かながわ

〒231-0821 神奈川県横浜市中区本牧原3-1-203

会長／松澤幹治 事務局担当／近田真知子

TEL・FAX：045-622-9661

E-mail：port@tpak.org

地球市民みえの会

〒514-0027 三重県津市大門7-15津センターパレス3F

津市市民活動センター内

会長／伊藤洋之 事務局担当／秋葉幸信

TEL：059-226-5700 FAX：059-224-8911

E-Mail：miemiemiemi21@hotmail.com

地球市民の会ぎふ

〒501-6241 岐阜県羽島市竹鼻579-1 竹花園内

会長／森幹治 事務局担当／平井八重子

TEL：058-391-5415 FAX：058-391-8600

愛媛地球市民の会

〒790-1121 愛媛県松山市中野町甲640

はばたき授産園内

会長／篠崎和夫 事務局担当／丹生谷宗久

TEL：089-963-3772 FAX：089-963-3795

地球市民の会福岡

〒814-0164 福岡県福岡市早良区賀茂2丁目30-4

(株)増屋内

会長／増田誠司 事務局担当／西村和寿

TEL：092-801-5888 FAX：092-801-5789

北九州地球市民の会

〒802-0006 福岡県北九州市小倉北区魚町1-5-14

中央会館2F

会長／河野一郎 事務局担当／大山研児

TEL：093-521-8181 FAX：093-551-2296

ネットワーク・テラ 2月号 VOL.122

発行：特定非営利活動法人 地球市民の会

〒840-0822 佐賀県佐賀市高木町3-10

ホームページ：http://tpa.nk-i.net

E-mail：office@tpa.nk-i.net

TEL：0952-24-3334 FAX：0952-24-7321

発行日：2006年2月27日

発行人：古賀武夫

編集人：地球市民の会 事務局

印刷：株サガブリんていんぐ



シンヨダヤ奨学金 里親あと1名不足！ ご協力お願いいたします！

121号で募集を行った「スリランカ シンヨダヤ奨学金」の里親が現在あと1名不足しております。この奨学金は、スリランカにおいて恵まれた才能と強い勉強への意欲がありながら貧困のために進学できない生徒を経済的、精神的に支援するために設けられたものです。皆様の温かいご支援があれば彼女たちはきっとスリランカを背負っていく人材になるはずです。里親あと1名！ご協力お願いいたします！

※詳細は事務局までお問合せ下さい。

地球市民の会 通常総会の期日が決まりました。

期日：平成18年5月21日（日曜日）

場所：佐賀県立女性センター 生涯学習センター

アバンセ4階 第3研修室

佐賀県佐賀市天神3-2-11

開始時間等の詳しい内容は次号の会報紙面にてご案内します。会員の皆様の積極的なご出席を心よりお待ち申し上げます。



編集 後記

■本年度も残り一ヶ月となりました。年が明けてあれよの速さに驚いています。さて、時といえ二十四節気の（にじゅうしせつき、七十二候（しちじゅうにこう）という言葉が思い出されます。二十四節気（にじゅうしせつき）は皆さんもご存知のとおり、一年の季節を二十四に分けて、その移り変わりを暦に取り入れたものです。立春や、雨水など耳にする機会も多いかと思いますが、七十二候（しちじゅうにこう）はさらにそれを細かく振り分けたものです。二十四節気はもと中国の陰暦で自然現象にもとづく季節区分であり、冬至を起点とし日本の季節にはそぐわなかったため、日本では一八四三年（天保十四）以後、太陽の軌道を二十四等分、起点を立春としたものを用いるようになりました。この二十四節気の一節を三等分したものが七十二候となり、五日を一候、三候を一気（二十四節気）とし、六候を一ヶ月、七十二候を一年としたのです。さて、ちょうど今回のネットワークテラが皆様のお手元に届くのはその七十二候の中の第六候、七候で表現されるところの、草木萌動（そうもくもえうどう）、桃始華（ももはじめてさく）といった頃でしょうか。この美しい言葉の響きを感じ、理解できるだけでも幸せな気分になります。■昨年は慌しい日々の中で、正直季節の移り変わりをあまり感じる事ができませんでした。今年はこの二十四節気、七十二候を意識しながら毎日丁寧に過ごせたらと思います。■蟄虫始振（ちっちゅうはじめてふる）（第二候。新しい何かが動き始めるこの季節。事務局では五月の総会に向けての準備に入ります。

今号のひとこと

「春だから×××・・。」

- ◆新しいことを1つははじめようっ と。 山田
- ◆心ウキウキ リフレッシュ！ 出かけるぞー 納富
- ◆事務局を卒業します。色々お世話になりました!! 川平
- ◆春だからこそ、また旅心!! 池田
- ◆春だから、春だからこそ。新たな気持ちで励みます!! 西村